林巳奈夫著『中国古玉器総説』

難波純子

本書の目的

中国の遺物の中で玉器は日本人にとってその魅力を最も理解しにくい遺物である。中国の人が古来、あれほど愛玩してきた遺物であるというのに、なぜ日本人にはその魅力がわからないのだろう。人間の作り出してきたものというのは、畢竟自然界に存在する材料に手を加えて、人間の意識を投影したものである。日本人が理解しやすい中国の遺物としては、焼き物や青銅器があるが、これらは、土や、鉱石を溶かして得た金属を加工して形作ったものであり、当然日本で製作されたものも基本的には同一の質感を我々に与えてくれる。これに対して玉器というのは、自然界に存在する玉材を直接加工したものであって、その質感はその材料が得られるところの環境の元で育ったものでなければなかなかすんなりと心に入ってこないに違いない。林巳奈夫氏の『中国古玉器総説』は、しかし、こうした愚直な我々の玉器の理解に対する指南を与えてくれる書である。その前言には、「この本は中国の古い時代の玉器を概説し、それの演じた中国史上での役割を理解してもらうために書かれた。中国の石器時代から青銅器時代、玉器は貴族が主役の政治や宗教の上で重要な役割を演じたからである。」とある。ひらたくいえば玉器にこめられた中国古代の人々の心を玉器を通して読み取らんとするのが本書の、そして林氏の研究の目的であるともいえよう。よって、対象とする時代は古代人が玉器に特に深い思いを抱いていた時代、すなわち「玉器の出てくる新石器時代から初期の王朝における玉器使用の最盛期を経て、伝統の余韻も絶えようとする漢時代末までに限る」こととなっている。

本書中の研究の特徴

林氏の玉器研究が一九六九年の「中国古代の祭玉、瑞玉」（『東方学報』京都第四〇冊）以来とすれば、都合二〇年あまりにわたる氏の玉器の研究は、一旦一九九一年に出版された『中国古玉器の研究』（吉川弘文館、一九九一年。以下、前著という）において集大成されているといえよう。それでは、それから八年しか経ていない今年、出版された本書『中国古玉器総説』と、どのようなちがいがあるのか、少し考えてみたい。前著の第一章では、中国古玉の研究が玉器の名称や使用法を周礼の記述に頼りきって行われてきたことを批判し、「新たな考古資料の知識を以って再検討することにより、『周礼』の瑞玉に関する記載のもととなった材料やその性質、その扱われ方が明らかになり、我々が『周礼』の記載をどのように資料として使用すべきかについての見極めがついて来るのである。」「個々の種類の玉器についての面倒な考証が続き、最後の章で新たに処理しなおした材料をふまえ、さらに関連の考古学、西周金文資料、文献資料を参照して考察を進めた

場合、祭玉、瑞玉が本来持っていたはずの社会的、宗教的役割やその時代的変遷のあとがどのようなものであったかが明らかにされるであろう。」とある。この記述によると林氏の当初の玉器研究は、『周礼』の記載を考証することが第一目的であり、考古資料はそのための補助的な道具として扱われていたといえるかもしれない。よって、前著における氏の論の展開の方法は、まず、新しい時期の図像や文献資料についての記述に始まり、そこから古い時代のものへと視点を移してゆくというスタイルをとるものが多かったように思う。

これに対して、本書『中国古玉器総説』では考古資料についての分析がすっかり主役の座を占めていることがひとつの大きな特徴である。その理由は、私の理解している限りでは二点あるように思う。

一つめは、「一九七〇年代の終り頃から発掘調査によって考古関係資料が急増し、多くの事実が新たに知られるようになってきている。」ことが理由である。

まず、新石器時代の玉器の資料については、ここ二〇年ほどの間に出土した資料が、それまでの玉器についての理解をほぼ丸ごと一新してしまったといっても過言ではない。たとえば、良渚文化の浙江省余杭県半山遺跡・瑤山遺跡をはじめとする遺跡出土の神像の刻まれた玉器をはじめ、紅山文化の牛河梁遺跡ほかの玉器・石家河文化の神面像・山東龍山文化の臨朐県朱封遺跡の玉器などの例は、質・量ともにめざましい情報を提供しており、中国ではこれらの資料を集成した図録が次々に出版されている状況にある。林氏はこのような重要な出土資料が入手できるようになる以前からすでに、既存のいわゆる伝世資料や土器など他の器物上の情報を援用しつつ、また新出の資料をその都度扱いつつ、そしてより時代の下る各種の図像の源流を遡るという方法を用いることによって、一人先んじて現在の常識に迫ってこられた。しかしながら、最近の中国新石器時代の地域性を重視した研究の成果は目覚しいものがあり、玉器の方面においても、こうした成果をとり入れて解釈が行われる傾向にある。林氏がこのあたりでもう一度これらの玉器を、新たな新石器時代研究の成果をふまえて最初からまとめてなおしておきたいと考えられたのも十分納得のゆくことであろう。

より新しい時期の玉器については、「圭について（下）」（『泉屋博古館紀要』第一三巻、一九九七年）に記されている氏の言葉が鍵を握っているといえよう。すなわち、かつて『周礼』記載の玉器を考古資料と結びつけて解釈を行ったことに対して、それだけでは圭の実際の使用法を認識することはできない、と自らその限界を指摘され、この論考では「それでは考古学の資料を主にして考えるとどういうことがわかるか。」をテーマとして、主に墓における副葬の原位置を詳細に分析することによって、圭の使用法ひいてはそれのもつ意味について考察を試みられているのである。後述するようにこの方法は、本書第二部の後半、すなわち第六章以降において、特に顕著に駆使されている。

そして、二つめの理由を説明するために、第二部の序言の中の言葉をまずひいておきたい。「筆者は大学で考古学の訓練を受けたので、遺物を手にとり、研究するのが大好きである。」「（ここからは）玉器そのものについての話である。」と。私には、この

言葉の中に本書の特徴が集約されているように思えてならない。第一部の第一章・第二章、そしてことに第二部全体には、林氏が、日本国内のみならず、米国や中国へとみずから足を運び、博物館や文物調査機関、あるいは展覧会会場で、玉器そのものを手にとり、観察し、あるいは自ら玉器を模倣して玉器や石器を製作された経験に基づく論考が満載されている。そして、それらの論考に基づいて、玉器の発達の様相や林氏の真骨頂である図像の解釈論が展開しているのである。

構成と各章の特徴

さて、本書の特徴をより詳しく説明するために、まず、構成について紹介しよう。

第一部　総論
　第一章　玉材
　第二章　玉器の加工法
　第三章　古玉器の名称と用法
第二部　各時代の玉器
　第四章　前六〇〇〇～前三〇〇〇年の玉器
　第五章　前三〇〇〇～前二〇〇〇年
　第六章　前二〇〇〇～前一五〇〇年
　第七章　殷墟文化
　第八章　西周時代
　第九章　春秋、戦国時代
　第十章　漢時代

以下には、もう少し詳しい内容の紹介をしてみたい。

第一部は玉器の入門編とでもいえようか。第一章では玉材について、『説文』や『管子』に、水の徳が玉に集い、人間の徳にもつながるという考え方が記されていることに端を発して中国人の玉に対する考え方について精神的な観点から迫る。その後、一転して科学的な観点から、すなわち軟玉について鉱物学的な分析を以って説明する。そして、玉質のランクや玉材の産地についてのデータをふまえた分析と続く。この章によって、玉器のもつ何とも表現しがたい質感についての理解が深められよう。

第二章では玉器の加工法について、考察が行われる。玉器の半製品の例、明・清から現代に至る民俗例、各期の玉器に残る製作痕、林氏自ら行った製作実験、と、さまざまな分析方法を駆使してその製作技法の実際に迫っている。概ねは一九九五年に発表された論考中に記されていることであるが、その後の見解もまじえて書きなおされている。

第三章　古玉器の名称と用法は、部分的には前著『中国古玉器の研究』第一章において集大成された名称と用法に関する詳しい論考のコンパクト版ともいえるのであるが、「新しい資料も年と共に当然増加し、自分の判断も変ってくる」ことから、考えを多少変更された部分もあり、決して同一内容のコンパクト版ではない。特に、良渚文化の琮や錐形器については、前著よりも緻密な羽根紋様の分析を行い、それを通じて両器種の使用法の理解を改めて試みておられる。また、佩玉・装身具については新たに書き加えられた項が少なくない。

かわって、第二部　各時代の玉器　では、時代を追って、すなわち前六〇〇〇年～前三〇〇〇年（新石器時代前期）・前三〇〇

〇年～前二〇〇〇年（同後期）・前二〇〇〇年～前一五〇〇年（二里頭・二里岡文化）・殷墟文化・西周時代・春秋・戦国時代・漢時代の各時期に分けて、玉器の発達の様相を描き出している。全般的には、各時期の遺物について、まず、出土地域を区分した後に各地で出土している玉器を器種ごとにひとつひとつとりあげ、玉器自体の特徴の分析、すなわちそれらの形状、装飾、装着方法・製作痕などの特徴について詳しく考察を加え、編年すなわち発達過程について説明してゆくとともに、墓や埋納坑における出土状況を詳細に検討することにより、各器の使用方法を考察するという方法をとっておられる。

前著においても、新石器時代の琮、石庖丁形玉器、骨鏃形玉器について、また玉器の縁を飾るいわゆる「鉏牙」について、かなりのページを割いて編年的研究や形態・用途の分析が行われている。しかし、そこでは本書におけるような地域区分を前面に押し出してから発達過程についての分析を行うという方法はとられていなかった。今回は、まず第一に地域差を前提として記述が進められているために、その変化の方向性が非常にわかりやすく、説得力が増したのではないかと、私は思う。また、特に玉器が各地で独自に発達する新石器時代後半の玉器については、各地域相互の交流関係や地域差について、詳しい分析が行われている。本書における玉器の編年研究の対象は、数器種にとどまらず実に多岐にわたっているので、読者はおおいに情報処理能力を必要とされるのではあるが、所々に他の時期他の地域の遺物との関連を示唆するヒントが記されているので、読んでゆく上で理解には困らないだろう。

ところで、林氏の玉器研究の展開の経緯と、玉器そのものの発達の経緯とそれに対する林氏の興味のありようの違いによって、林氏の玉器についての解釈には、二つの大きな根幹となる流れがあるように思う。無論、それらは複雑に絡まりあっているので、単純に切り離すことはできないのであるが。

その一つはいうまでもなく、玉器に表わされた神像とその背後にある古代の日月神信仰の解釈である。前著では、漢代の「気」の表現に端を発して、時代を追ってその源流をさかのぼり、良渚文化の神像や河姆渡文化の骨器に表わされた双鳥の太陽と月の象徴表現にゆきつく、という論考にかなりのページ数が費やされている。やや大胆とも思えるこの見解は、その後気象学の知識をとりこまれて少しずつ深められ、つぎのような趣旨の見解に達するに至っておられる。この双鳥は、太陽が東に昇る時、その途に沿った所に生ずる太陽柱と、その上端の蓮の花に見たてられた上端接弧、パリー弧といった暈に原形をもった日月の神を表わしたものであり、良渚文化の卵形の目を持つ神像へとつながるものである。また、良渚文化においてこの神像と組み合わせて使われる白目を持つ神像のつける羽根紋様は、その日月の「気」の表現に起源を持ち、それを鳥の羽根をもって表現したものである。さらに、火の神、大火（アンタレス）星の象徴であるイヌワシの図像と共に用いられる、という見解である。本書においては、第一部第三章、および第二部の前半の多くの考察がこの見解に立脚しており、さらに、この見解の正当性を強化し、より深めるかたちで表されている。

もう一つは、玉器の上から精神世界をあらわす象徴的図像がほ

ぼ消え去り、政治的な色彩が濃くなる二里頭文化期以降の玉器のもつ象徴性の解釈である。本書の第二部後半では、この時期以降、武器や農具に由来する玉器が増加し、特に二里頭文化期から殷代にかけての武器に由来して発達する圭は、その神秘的な力によって被葬者の守護の役割を期待されるようになり、西周後期以来、日月の「元気」の象徴として残存する璧と組み合わされて墓に副葬されること、そして、それが次第に形骸化される過程が強調されている。この見解は、前述のように第二部後半の各章で駆使される、墓における玉器の副葬状態の詳細な分析に基づいて導き出されたものである。このほか、該期のその他の玉器についても同様に墓や埋玉坑における出土位置が詳細に検討され、装身具や幎目・玉衣などについての考察が行われている。私個人としては佩玉の詳細な観察を基に、その仕上げの優劣の存在と持ち主の生前の愛玩度や使用頻度について言及された考察が大変興味深く感じたが、このような考察は氏の着眼点のユニークさと観察眼のたまものであろう。

改めていうまでもないが、玉器には象徴性がこめられており、特に新石器時代の玉器上に刻された紋様が当時の精神世界を表現していることは確実であろう。したがって、その解釈を通して玉器そのものの象徴性を問う、という林氏の提示した命題は、玉器研究者にとっての究極の課題ともいえよう。この命題に果敢に挑みつづける林氏の、特に新石器時代の玉器についておこなったような大胆な解釈をめぐっては、その証明方法をも含めて、今後、学界においてより活発に議論が展開されることを望みたい。

ところで、本書中の新石器時代の玉器についての記述には玉材についての情報が多く、読者もその質感を頭の中に描きやすい。しかし殷墟期以降少しずつ玉の色の好みが変わり、また、玉材の生産地も変わるためか玉器の色調や質感が変化したり、バラエティーに富むようになってゆくようであるのに、春秋・戦国時代以後の章では、玉材についての記載がややすくなく、その色合いや玉質の変化の状況が読者にわかりにくい部分がある。戦国～漢代の玉材や色彩感覚の変化についてもう少し詳しくご教示願いたいというのは欲張りであろうか。

おわりに

本書の体裁について述べるならば、写真と図を見開きの片側のページにならべ、もう片側に文章がくるように考慮して編集してある。たとえば、第二部の記述の中に第一部第三章の図版が引用されているような場合にはページを繰りなおさねばならないが、おおむね、豊富な図版の中から目当ての図がすぐに見つかるので、文章の理解を助けてくれる。林氏ご自身、あとがきに「図が多いと思っても、これ位は必要であろう。」といっておられるが、手元にこれだけの玉器の資料をそろえおおせていない不精な読者にとっては、まことにありがたい限りである。また、読者自身が何か玉器資料について時期や特徴を検索しようと思うときには、この書の図版を繰って類似の器を見つければよいので、便利なことこの上ない。

なお、これは出版社への注文であるが、「琮」・「繅」籍などの字の形態があまり美しくない。こうした標準日本語フォントにない漢字は外字として作成する際にその形をよく吟味してほしい。

古代の崇高な神器の話であるのに、字体のせいでなにかその品格が落ちてしまうような気がするのは、もったいない限りである。

本書を読めば読むほど、林氏が玉器の魅力にすっかりとりつかれ、我々とは別の次元に入りこんでしまわれているように思えてならない。そして本書は林氏のこうした玉器への深い愛着を背景に書かれているのであり、氏のいにしえ人との対話の記録のようにも思えるのである。最初に述べたように、本書は玉器を素人に解説するのが目的であるとはいえ、徹頭徹尾林氏が描いている古代人の精神世界が一筋の太い流れとして貫き通されている。読者は読み込むほどにその世界に引き込まれてゆくことになろう。

（A5版　五二四頁　原色図版四頁　一九九九年一月二〇日発行
吉川弘文館　三七〇〇円）

（天理大学非常勤講師　　）